

奄美におけるユタの成巫過程に関する覚書

八木橋伸浩

はじめに

琉球弧を形成する奄美・沖縄地方における呪術的・宗教的職能者として知られてきたのがノロとユタである。公的な祭祀における巫女としての役割を果たしてきたノロに対し、民間におけるそれを担ってきたのがユタである。ユタという名称(呼称)は、研究者間において、また、当該地方においても慣用的名称として使用されているが、ユタ自身さらには当該地方住民にとって常用される名称というわけではない。沖縄における用例はここでは省略するが、奄美においてもいくつかの俗用名称が知られており、なかでもユタ自身は「カミサマ」の呼称を用いる例が少なくないといえる。本稿で紹介する事例においても「カミサマ」、その成巫過程を指導・差配する既存のユタは「オヤサマ」「オヤガミサマ」といった呼称が用いられている。また、民間の巫女といった位置づけからも理解できるように、ユタという存在においては女性が占める割合が圧倒的であるものの、男性ユタも存在している。

さて、日本における同様の呪術的・宗教的職能者としては、イタコ、ゴミソ、行者、巫女、祈祷師など、列島各地の事例が報告されており、日本におけるシャーマニズム研究の対象とされてきたが、なかでもユタはその代表的対象として取り上げられてきた。沖縄に関しては、桜井徳太郎の『沖縄のシャーマニズム—民間巫女の生態と機能—』(弘文堂, 1973年)が、奄美に関しては、山下欣一による『奄美のシャーマニズム』(弘文堂, 1977年)が代表的な業績として知られている。シャーマンとしてのユタを対象とする個別の論考も少なくないが、本稿では紙幅の関係から省略させていただくことをお許しいただきたい。いずれにしても、南西諸島におけるユタの研究は主として民俗学、文化人類学の分野において蓄積されてきた。そして、ユタの果たしてきた役割や機能とともに注目され、調査・分析が進められてきたのが成巫過程に関する研究であるといえよう。南西諸島のユタ研究

においても先駆的な業績を示した宗教学者の佐々木宏幹は「そのイニシエーション(成巫)の過程に見られる諸特徴において、またその儀礼執行における霊的存在(カミ・ホトケなど)との接触・交流の型や特質において、さらに儀礼執行時に見られる特殊な心理・精神的状態において、世界各地に広く分布するシャーマン(shaman)に概念的に類似し、相当する性格と役割を有している」[佐々木 1983:187]と指摘している。また、山下欣一がユタの成巫過程の事例を取り上げ詳細な分析を施した論考[山下 1983他]の成果は記録されるべき業績の一つとなっている。本稿では、そうした伝統的かつ当該地方の基層的な宗教観念を保持し具現化してきたユタの成巫(イニシエーション)過程の一端について、現代の事例を書き留めることを目的としている。

ただ、筆者はこれまで、南西諸島で展開する豊年祭における相撲(角力)形態とその機能等に関する調査・検討は行なってきたものの[八木橋・栄 1999, 八木橋 2000, 2008], 民間の呪術的・宗教的職能者であるユタを調査対象として取り上げたことはなかった。もちろんその存在について理解や知識がなかったわけではないが、民間祭祀における主催者の役割を果たすユタに関する論考をしたための経験は有していない。つまり、筆者はユタ研究において初心者同様の人間である。

そうした筆者がこの覚書を残しておきたいと考えたのは、近年、管見ではあるがユタの成巫過程に関する報告をほとんど目にした記憶がないことと無縁ではない。しかし同時に、これは筆者自身がユタに対しての興味関心を有していなかったことで、関連業績に関して無知であったこともその背景にある。そして、筆者自身の知り合いである女性がユタとして新たな人生を歩み始めたとの報告を、その女性本人からいただいたことが、本稿をまとめるに至った最大の理由である。繰り返すが、筆者の認識する範囲内ではあるものの、現代におけるユタの成巫過程に関する報告事例が見当たらない状況を鑑みれば、これを記録し、報告することも、一人の民俗学徒と

して果たさねばならない使命であると考えたのである。

しかし、本稿はユタの成巫過程について、佐々木宏幹が指摘するような視点を踏まえる事例報告とはなり得ても、山下欣一が精力的に取り組んできたような分析レベル〔山下 1977, 1983〕には到底至るものではないことをまずお断りしておきたい。そして、紙幅の関係等から本稿に収まりきらなかった成巫過程を経験したインフォーマントであるユタ本人に関する諸情報、そしてなぜユタにならねばならなかったのかといった点については、次号で改めて文字化する予定であることを付記しておく。

なお、個人情報保護の観点から、本稿では人物名について基本的にイニシャル表記とさせていただいた。ただし、成巫過程を経験しユタとしての新たな人生を歩み始めたインフォーマント本人からは実名掲載の了解を得ているため、実名で記載させていただいた。さらに、インフォーマント本人のオヤとしての役割を担うユタにあたる方についても、すでに実名で世間に周知されている状況に鑑み、実名での記載とさせていただいた。

聞き取り調査は2017年3月、2020年2月に実施したが、本稿は主として2017年の調査記録に基づいている。

和泉和香をユタに導いたオヤサマ

和泉和香をユタとして導いた師匠ともいえるユタが栄サダエ氏である。こうしてユタの成巫過程を指導し差配するユタは、成巫を経たユタにとってオヤサマと呼称すべき存在となり、成巫後は成巫を経たユタにとってのオヤと同時にハハとなる。

【オヤサマ・栄サダエ氏】

和泉和香のオヤサマにあたる栄サダエ氏は奄美市笠利町佐仁に居住する奄美で最も著名なユタの一人である(写真1参照)。サダエ氏からの聞き取り調査は2017年3月4日に実施した。サダエ氏に関しては、落合美貴子『奄美シャーマンのライフストーリー―神を生きる―』(南方新社, 2012年)に詳細な記述があるほか、西村仁美『「ユタ」の黄金言葉(くがにくうとうば)』(東邦出版, 2007年)など何冊もの書籍や雑誌に取り上げられている。また、2008年1月1日発行の西日本新聞では、記事のなかで霊能力者として紹介されている。

和香(※和泉和香の名前は以下、和香と表記する)の同行のもと、栄サダエ氏の自宅に伺った(写真2参照)。

栄家には全国からみてもらいたいという人が来宅して



写真1 栄サダエ氏自宅玄関の鳥居



写真2 栄サダエ氏(左)と和泉和香(右)

おり、カレンダーにはほぼ毎日、数人の名前が記されていた。福島から訪れる人も多いとのこと、団体で来る場合もあるとのこと。基本的に電話で予約して来てもらっており、一年をとおして多数の人が来宅している。また、自身が出かけていくことも少なくない。喜界島には飛行機で日帰りで行っているようだ。

サダエ氏は小さいときは病弱で、血圧が低く、体温も低かった。体温は今も35度台とのこと。そして、苦悩の経験がないと他人の痛みはわからないという。サダエ氏自身は、食べるものがなく水を飲むだけの生活のなかに、カミになるくらいの方々の痛みがあったと語る。カミになる条件は、純粋であること。そのままの自分で生きることが大切だということ。これは、そのように自分のミカタサマ(ユタそれぞれに降りた神様)から教えられたとのことであった。「嫁ぎ先の親がわが親となる。だから、女の子は結婚させなければならない。生みの親は一時的なもの。アラバ(荒場)のものは美味しい。波や風にもまれたものだから。やさしい環境のものは美味くない」ともサダエ氏は語る。

サダエ氏のオヤサマは名瀬の人であった(30年以上

前に死亡)。それまで我慢の人生だったサダエ氏は仕方なくユタのところに行くが、そこで、命を取るか、拝むかの選択が示され、その選択でサダエ氏は拝み（ユタになる道）を選んだのだという。

和香についてサダエ氏は、「学問を持っている人はダメ。カミにすぎる意識が薄い。和香の場合もそう」と指摘する。和香はまだまだで、修行の至らなさ、経験不足が大きいとのことであった。

【カミサマとして】

自分はすべて対応できるが、カミ（ユタ）にも専門があるという。専門は大きくエキ（易）とオハライ（お祓い）にわかれる。和香ができるのは、今はエキのみで、それは和香が学んできた学問が邪魔しているからだという。しかし、将来はオハライもできるのではないかとのことであった。

ノリト（祝詞）に決まりはない。すべてミカタサマから教えてもらったもので、他人の真似は一切していないという。「カミから伝えられることは、脳に見える。世のはじまる前からのカミ（ハダカユノカミ）が自分にはついている。だから、世界を上の方から俯瞰して見える」のだとも。そして、ユタによって降りる神様は異なり、これは人間性によるとのことであった。

【和香の成巫に関連して】

和香がユタとしての成巫に臨む前、成巫を延期しなければならない状況も生じた。それは、和香が栄サダエ氏のもとへ伺う前であるが、毎年エキ（易）を取ってもらっていたMカミサマ（栄サダエ氏の子カミサマ）に「あなたはカミサマにならないといけませんが、私（Mカミサマ）はあなたのオヤ（親）にはなれない」といわれ、和香への確認がなされることなく、Mカミサマから延期願いをかけられた。しかしながら、結局、延期願いは棄却された。

結果として和香にはアマテラス（天照大神）が降りているが、嫁ぎ先の和泉家のノログミサマを降ろしたときは、両親を同席させなかった（※後述「和泉和香の成巫過程」参照）。

和香は2016年7月から11月まで名瀬の両親と会っていない。両親のカミに対する準備ができていないと栄サダエ氏が判断したからである。シクジリガミ（成巫式が失敗する）にならないようにするためであった。このため、サダエ氏とのオヤサマとしての関係を1回絶つと和香は両親に嘘をついている。先に進むため嘘をつくよう、

サダエ氏は和香に指示したのであった。オヤサマを1回悪者にしないといけなかったのである。サダエ氏は、和香がここに来たときは、「ひどかった。かわいそうだった」と語る。カミサマになるには親の協力が不可欠なのだが、両親は本人の苦しみをしっかりと理解できていなかったという。サダエ氏自身が成巫したときは、まわりがすべて協力してくれたとのこと。その点で和香の旦那さんは協力的だとサダエ氏はいう。

【アムイゴのカミへの挨拶】

60日ごとにおとずれる癸酉（ミズノトリ）の日がアムイゴのカミの祭日である。この日はアムイゴのカミサマにシュウギ（上モチ粉で作った大きな団子）を持っていき挨拶する。この祭日には、ススキ3本、シュウギ1つ、線香7本を立てて拝む。水の神様を拝む人も含め、カミサマになるには、このアムイゴに挨拶しなければならない。ゴは川の意味であり、アムイゴはノロと関係している。

【エキ（易）の体験】

筆者はサダエ氏からお話を伺ったあとで、和香に教えてもらい事前に用意した拝みの奉納（封筒に奉納と書き、



写真3 祭壇に拝みをする栄サダエ氏

一般的な拌みの奉納金だということで3,000円を入れたもの)と、和香がコンビニで急遽買った拌み用の神酒(焼酎の2合瓶で蓋が盃兼用になったもの)をサダエ氏(オヤサマ)に渡し、筆者自身についてのエキ(易)をみてもらうことになった(写真3参照)。

血圧の下の数値に気を付けること、しゃべりが悪いこと(喉が最近枯れていて発声が悪いということか)など、ネガティブな指摘をいただく。が、同時に、3～5年後にはこれまでの苦勞がすべて報われて、名刺を配るだけで世渡りできるような大きな変化がやってくるという。そのときに、その分岐点での選択をするかしないかは自分次第とのことであった。

和泉和香の成巫過程

和泉和香は1977年(昭和52)に名瀬市(現奄美市)で生まれ、結婚して和泉姓となってからは、ご主人の生まれた大和村に暮らしている。

2017年3月5日、自宅に伺い、成巫過程を中心とする体験を語っていただいた。

【成巫儀式用のミキ作り】

2016年10月18日、成巫儀式のために使用するミキ(神酒)を作るための材料を集めた。ミキに使用する米は自分で用意しても、知り合いからもらってもよい。米は名瀬で米粉にしてもらった。7合分(約1.5キログラム)のミキを作ったのですごい量だったという。

和香はそのとき生理中で、ケガレとカミゴトとの関係性がわかっていなかったので念のため穢れてはいけないと考え、触ることができないまま作業を見ているだけであった。ミキについては、大熊(※奄美市内の地名)のトネヤの娘さんが大和村の生活研究グループの一人で、彼女の親がミキの作り方を知っていた。彼女以外に婦人会の仲間などにも手伝ってもらい、ミキを作ってもらうことにした。

翌19日、思勝(※大和村内の地名)集落の公民館でミキ作りの作業をした。まず、白イモは皮をむいてから摺り下ろす。これをサラシのうえに置いて搾り、搾り汁を出す。この作業と並行して大きな鍋でお湯を沸かす。米粉の1割を取り分けておき別しておく。搾り汁と1割の米粉を混ぜ、団子を作る。この団子をナマガンという。団子は小さく小分けにして置いておく。残りの9割の米粉をふるいにかけながら、鍋のなかの湯に入れる。入れるときはゆっくりとした作業になる。このとき、火

は止めた状態で、ダマにならないようにしながら混ぜていく。この作業中は手を一旦止めることはできず、ずっと混ぜ続ける。混ぜ続けると、ねっとりとした状態になる。その後しばらく蓋をして蒸らす。

しばらく蒸したら、蓋を開け冷めるまで待つ。そこに先に作っておいたナマガンを入れながら混ぜる。その際、うちわであおいで冷ましながらの作業になる。冷めたら、ねっとりとした状態のものをツボに移す。このツボにバショウの葉で蓋をして、注連縄で閉じる。ツボは大和村の地域おこし協力隊の若い女性に依頼して運んでもらった。

【2016年10月21日に行なった成巫儀式】

午前10時30分、オヤサマが来宅。その後、午後5時ころまで在宅。すでに神棚(祭壇)は設えてあったが、成巫儀式当日にオヤサマの指示で整えた(※成巫前だが、以下、便宜的にオヤサマと表記する)。

成巫儀式には必ず吸いものが必要で、この吸いものもミキを作った生活研究グループの女性の2人に作ってもらった。吸いものには、昆布、餅、エビ、玉子、シイタケ、蒲鉾、青物(そのときにあるものを使う)が入る。吸いものの椀も公民館にある思勝集落のものを借りて使った。

儀式のとき、親代わりは親戚のIKさんとAKさんが務めた。

オヤサマに事前に用意しておけといわれていたことは、神棚、吸いもの、丸餅(吸いものものとは別に)。丸餅は儀式に参加した人へのお返しにするためのもので、紅白ではなく、白白の組み合わせにしたもの。大きさは直径10センチくらい。2つ入れて箱入りにした箱餅として、名瀬のお餅屋に頼んで用意した。あとでオヤサマに聞いたところ、実際は直径5センチほどの丸餅でよかったとのことだった。神棚には事前に注連縄をセットしておき、そこにオヤサマがシデ(紙垂)をつける。シデはその場で半紙を切って作ったもの。

その他、用意しておいたものは、海のもの、山のもの。海のは尾頭付きの魚などで、山のは野菜など。これをそれぞれ三宝に載せた。また、日の丸の描かれた扇を3つ(枚)用意した。

神酒徳利に挿すアサヒバナ(※神酒口にあたるもの)も、その場で半紙を折ってオヤサマが作った。このアサヒバナは身内にお悔やみがあった場合などには作り替えないといけない。

さらに、タカボンと呼ぶ木製の腰高の膳のようなもの

も事前の用意が求められ、これは母親の同窓の旦那さんに木工所の人がおり、この人がタカボンを作った経験がある人だったため、この人に依頼して作ってもらった。大きさについては、祭壇がある部屋の広さ（大きさ）に合わせて、オヤサマから45センチ×45センチにしなさいとの指示があった。

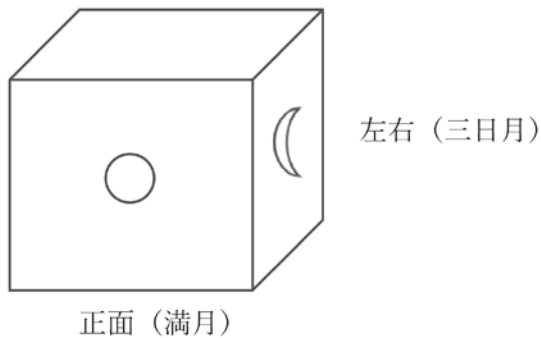


図1 タカボン（※満月と三日月は掘り抜き）

タカボンの上には1升3合3勺の米を載せる。その米に線香7本を立てた。線香は香炉に立てたり置いたりしない。この米とススキ・榊も事前に用意しておくようオヤサマから指示された。ススキ3本と榊1枝で1組、これをオヤサマと和香がそれぞれ手に持つ。なお、和香がその日の朝に用意したのはススキとともにガヤも含まれていたため、オヤサマの旦那さんがすぐに切ってきてくれた。

そのタカボンをはさんで、オヤサマと和香が向かい合い、オヤサマの質問に答える（イイブンカケという）。そのうち、次第にトランス状態になっていった。その際の会話は基本的にシマグチ（奄美方言）であるが、和香はまだよく喋れないという。

最初に降りてきたのはアマテラスオオミカミ。アマテラスオオミカミのことはテルコガナシミカタンサマと称する。「あなたは何代目か？」とのオヤサマからの問いに和香は「36代目」と答えた。

降りた、とオヤサマがわかった瞬間、チヂン（太鼓）と三味線を弾かせ六調を唄ってもらう。和香は少しずつ立ちあがりススキを持ったまま六調を踊った。

そのとき、ころ合いをみて和香はオヤサマからススキを持っていない方の手にミキを渡される。和香はそのミキを天井に投げていた（写真4参照）。このトランス状態が落ち着いたら、六調も終わりとなった。

六調が終わっても、まだトランス状態から解放されず、オヤサマから「あなたのアムイゴはどこです



写真4 天井に投げたミキの痕跡

か？」と尋ねられると、和香は「思勝川の上」だと答えた。こうした状態だと走っていく人もいるといわれるが、和香は酔っ払い状態のようにフラフラとしたまま、また目も半分くらいしか開いていない状態でアムイゴへ行った。和香はオヤサマからアムイゴへ行く際にはシュウギ（上餅粉を水で溶いただけで作った団子）を用意しておけといわれていたため、事前に用意しておいたシュウギを持ってアムイゴへ向かった。線香を持ち、チヂンを叩きながら行った。その場所へ着くと、シュウギを置きやすいところへ置き、線香を立てて拝んだとき、「はい六調！」の合図でチヂンと三味線の演奏とともに六調を踊った。その後、そのアムイゴの石（ミタマサマ）を3個いただいて帰宅した。

このあと、いったん飯（昼飯）を食おうとなった。吸いもの、刺身などのほか、菓子も食べた。お昼のときは、袴と神衣装は脱いだ。袴は普段の拝みのときなどははずさず、こうした儀式のときだけ使用する。

これはお祝いの儀式なので、三味線にあわせて朝顔節を唄った。朝顔節はお祝いのときの定番の唄である。

和香本人が落ち着くまで待ち、タイミングを見計らい、次は和香の嫁ぎ先である和泉家の実家（同じ大和村思勝集落内）の仏壇に挨拶に行った。このとき、吸いものとミキを持っていった。実家で義父と義母に挨拶し、仏壇に吸いものを供えた。その後帰宅。

自宅に戻ると、タカボンの上に線香を7本立てる。先ほどのススキも右手に持った。そして、和泉家のカミサマに降りてきてもらう儀式をした。その際、不思議と和香自身の理性は働いていたという。シマグチができないので、オヤサマに標準語で喋ってよいかと聞いたほどであった。このときの六調は非常に長かった。三味線を弾いた男性は、これほど長いのは初めてとのことであった。ススキを鍬のように振るって穴を掘っていくと大きいイ

モが出てきたという和香本人の語りや所作に、周囲は大笑いだったという。まさに一人寸劇のようであった。まだまだと、和香は自分で周囲を煽り立てたりもした。このとき、ミキはすでに投げていた。六調は全身で踊るので、和香も六調のリズムにあわせて踊ったあとはぐったりであった。

その後、和香は大量の水を飲みほした。そして、その日一日付き合ってもらった人々に一人ずつお神酒(焼酎)を瓶のフタで飲んでもらい、挨拶をした。沖縄から来てくれていた人もいた。最後に唄でも唄えとオヤサマにいわれ、八月踊りのアシナレ(三足踏)、ヨイスラブシ、「月ぬ美しゃ」の計3曲を唄った。唄い終わると「はい、お疲れ様でした」で解散となり、儀式は終了した。

オヤサマとオヤサマの旦那さん、カミゴトをよくしてくれるオヤサマの友人で信心深い方の3人とお茶を飲み、その後オヤサマたちも帰っていった。オヤサマの友人は和香を「ミイガミサマ」(新神様)と呼んでくれた。奄美では「ミイ」は「新」の意味で、例えばミイムンは新品のことである。後片付けは和香自身で行なった。

大和村役場の親しい女性も3人、儀式に参加し見学し手伝ってくれた。また沖縄大学のMY先生、M先生の教え子で九州の大学に在籍する沖縄のノロの末裔の女性も駆けつけてくれた。この日の儀式には、和香の旦那さんを含め、両親の代理としてIKさん、AKさんなど計15人が立ち会った。

【翌々日10月23日に行なったミキヤムドゥリ】

10月23日には、3日後の実家戻りの日としてオヤサマの家でミキヤムドゥリを行なった。そのときも親代わりとしてIKさんが同行した。この儀式のあと、カミの子としての和香の実家はオヤサマの家となる。そして、オヤサマは和香のオヤでありハハとなるのである。なお、オヤサマは「上がる陽ぬ春加那節」という唄はカミウタだという。この唄のなかには「テルコから下りて今日で3日」という一節があるからだという。3日経ったら親元へ戻るという一節である。

このときも、神衣装(袴, シラギン, 鉢巻, マガタマ)を身につけた。マガタマとは水晶の八宗派兼用数珠である。成巫儀式のお礼の奉納をそのときに持っていった。オヤサマの家のタカボンをはさんで座り、タカボンの上には21日のときと同じように米・ススキが用意され、線香が7本立てられた。

この儀礼では、降りてきたカミがしっかりと降りたのが確認された。つまり、テルコガナシサマと和泉家の

カミサマがしっかりと降りたかを確認するための儀式であった。その際に、和香はまたトランス状態になった。

最初は向かい合って正座していた。が、次第にトランス状態となり、和香は勝手に喋りだした。このとき、明らかに男性が降りてきた。酒が飲みたいという。飲んでから私はずっと暗いところにいた。酒も飲めないし人もいない。このことをずっといい続けたという。戦争のとき、奄美の真上を飛んでいた。焼酎をもっと飲ませてくれ。飲めなかったんだと、しばらくぶつぶつと同じことを繰り返した。すみませんが水を下さい、飲ませて下さいと和香はいい、コップの水を飲むと、おいしいやと喋りだした。ずっと屋根裏にいたので、水なのか焼酎なのかかわからないまま何杯も飲んだ(実際は水を2杯飲んだ)。これは、和泉家でかつてオヒツ(櫃)を管理していたカミサマが降りてきたのではと思われる。

この男性が抜けていくと目が覚めた。

そこでオヤサマは「おめでとう」といって涙を流してくれた。

同席していたのは、オヤサマ、オヤサマの旦那さん、前述のオヤサマの友人、親代わりのIKさんの計4人。

これで、テルコガナシサマ(アマテラスオオミカミ)と嫁ぎ先の和泉家に保管されていたノロのオヒツを和香がお預かりする儀式は終了した。

【ここまでの儀式における背景と要素】

オヤサマは、21日の儀式のときに芦検(宇検村芦検)のI家(和香の母の実家)のノロサマが降りてきたがっていたという。当日の格好はそうした儀式の格好であり、ノロ道具があったためだという。ノロ道具とは、チンマキカヅラとナナノアヤハブラのことである。しかしそれに加えて、嫁ぎ先の和泉家に保管されていたノロ道具が収められたオヒツがあったため、I家のノロサマは降りることができなかった。

チンマキカヅラとは頭にはめるもので、ツル植物でできている(写真5参照)。オヤサマが用意してくれた。また、ナナノアヤハブラは、頭に付けたチンマキカヅラに挿すかんざしのようなもので、挿した上から白い鉢巻をしめる。ナナノアヤハブラに使う木はブブの木(ナリモチ<マヤダマのようなもの>に使う木)の枝に七色(色は何色でもよい)の七枚の△型の布を重ねたものをつけ、さらに白い鳥の羽をつけたもの(写真6参照)。オヤサマは木は割り箸でもよいといったがブブの木の枝を用意した。七枚の△の縫い合わせた布は和香の実家の母が作ってくれた。羽は建具屋の奥さんの家の近くに鳥を



写真5 チンマキカヅラをつけた様子

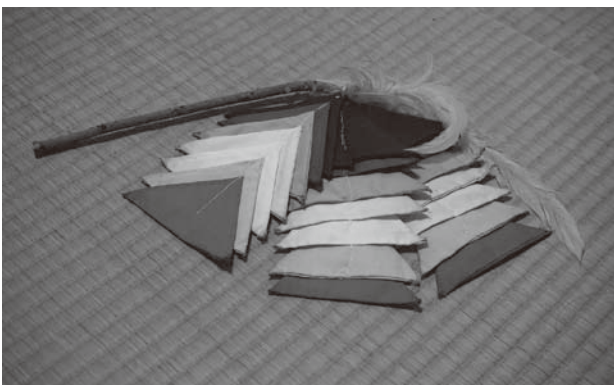


写真6 母が手作りしたナナノアヤハブラ

飼っている人がおり、そこでむしってきてくれたニワトリの羽を使用した。63枚の△の布と羽をブブの木の子に和香は自分でくりつけた。ナナノアヤハブラは3本必要（1つのかんざしに、7枚の△を縫い合わせたものが3組・羽が3枚）。

このナナノアヤハブラは21日の儀式のときには用意していなかった。このため、芦検のノロサマはノロ道具としてのナナノアヤハブラがなかったので、状況が整っていないと考えて降りてこなかったという。そこで改めてもう一度、芦検のノロサマを降ろす儀式が必要になった。そのときまでにナナノアヤハブラを用意するよう和香はオヤサマに指示され、2016年12月18日に自宅にて作成した。

こうして、2回目の儀式を行なう日程も決めたが、和香がカミゴナシになったため延期になった。しかし、オヤサマによれば、芦検のノロサマは年内でないと待てないといっているという。そこで日柄をみたら、先勝の巳の日にあたる2016年12月25日がよいということになった。このカミゴナシとは、カミへの不礼に対して与えられるカミからのお返し。カミからのサトシである。カミ

ゴナシは自分だけでなく、家族にもおこる。成巫後の事例であるが、和泉家の祭壇のある部屋で運動をした数日後、和香は起きられなかった。目があいても引っ張られて起きられない。夕方の5時ごろになりようやく起きることができ、カミサマのお茶と水を替えた。起きられなかったのは運動の結果ではなく、カミゴナシであったという。

【2回目の儀式に向けたミキの準備】

2回目の儀式までにはミキも作るように和香はオヤサマから指示された。このときは和香自身でミキを作った。しかし、ムラサキイモや黄色のイモはあったものの、時季的にミキに使う白イモがなかった。そんなとき、生活研究グループの一人の家の冷蔵庫に白イモがあったので、それをいただくことができた。

ミキは「三日ミキ」なので、23日に作った。ふつうのミキの場合は砂糖を入れて作るので一晩で発酵してほどよい甘さになる。しかし、砂糖を入れずに作るので、二晩寝かせないと発酵しない。本当は1回目の儀式のときと同様にお餅も必要だったが、オヤサマが遠慮して和香にいわず、オヤサマ側が用意してくれた。また、吸いものは2回目は作らなかった。

【12月25日に行なった2回目の成巫儀式】

当日は和香の実家の両親も参加した。また10月の儀式にも参加してくれたKMさんも再び参加してくれた。

オヤサマからはミキとナナノアヤハブラだけあればよいといわれたが、お餅は結局オヤサマの熱心な協力者が用意してくれていた。また、シュウギ（21日にアムイゴへ行ったときと同様のもの）の用意、すまし汁（ソーメン汁でもよいと）の用意も指示された。また、芦検で立ち会って下さる方々にふるまう赤飯や野菜の煮物なども持参した。

このときの六調はCDで代用した。

オヤサマには一旦、大和村の思勝に来てもらい、自宅の祭壇で拝んですぐに宇検村の芦検に移動した。儀式を行なったのは芦検にある母方のオバの家で、現在は別荘として利用している家であった。ここを儀式の場として確保した。元々の母の実家（母方の祖父母の家）は他人に貸しており、この家の権利は長男の息子が相続しているためであった。

昔の芦検をよく知る人たちにお願いしてオバの家に来てもらい、儀式に立ち会ってもらった。この人たちは家の鍵を持っているおばさんに母が頼んで声をかけても

らった。2～3人来てくれればよいと考えていたが、10人ほど来てくれ、廊下にも座ってもらったほどだった。

この日の儀式の格好は、すでに思勝で身支度を整え、頭の飾りまで付けた状態で芦検まで車で移動した。昔は、こうした儀式では白い馬に乗って移動したという。実際、オヤサマのときにはそうしたという。

タカボンは、10月の儀式の時点で、アマテラスオオミカミサマの分とI家のノロサマの分の2つを先に用意してあった。この日は和泉家から持参したタカボンをテーブルの上に置き、1升3合3勺の米を盛り、そこに線香を7本立て、向かい合わせに座るのではなく、その右側にオヤサマが座り、左側に和香が座った。

オヤサマには昔の風景も見えてしまうので、昔の芦検のアムイゴに行く道のことをオヤサマが喋った。オヤサマと和香の話がはじまり、和香の旦那さんの後日談によれば、和香は泣いていたという。

この儀式の日柄を決めるためにオヤサマのところに行ったとき、オヤサマは芦検のノロサマの名前はヨシグリさんだといっていた。オヤサマの家から自宅に戻る車のなかで頭のなかに浮かんだのは、女の子が男の人に叩かれている画だった。そうした画が出てきた(見えた)。それが影絵のようになって、和香の頭のなかに残っている。

儀式がはじまり、和香はトランス状態となり、自分はずっと身内からいじめられていたこと、それを誰にも話せなかったことなど、ようやく皆の前で話すことができた。ヨシグリさんもよかったようだ。オヤサマの合図で六調がはじまった。来ていた芦検のI家の本家の奥様(大正生まれ)は涙を流しながら聞いていたという。和香は次第に立ち上がり、六調に合わせて踊っていたとき、お椀のフタ(自宅から持っていったもの)に入ったミキをオヤサマが次々に和香に渡し、和香はこれを12回、上に投げた。回数は自宅での成巫儀式と同じである。何人かは一緒に踊り、他は囃し立てていた。和香の旦那さんはハト(指笛)を吹いていた。旦那さんのハトは10月の儀式のときも同様である。

その後、昼食になったときには和香はふつうの状態に戻っていた。食事は、赤飯(オバに頼んであった)、玉子おにぎり(和香の母が作った)、シマの野菜を炊いたもの(同前)。昼食後は皆に挨拶し、焼酎の瓶のフタで焼酎を飲んでもらった。お礼を述べたあと、和香は半紙にはさんだ白餅1枚を一人ひとりに配った。配ったのは、芦検の人たち、そして当日の撮影を担当したKMさんと和香の両親。

これを行なったあと、アムイゴに皆で一緒に行った。アムイゴに着くとシュウギを置き、オヤサマが線香を7本立てて拝んだ。シュウギを置いた場所は砂防ダムの水が流れ落ちるところのたもと。そして、オヤサマが「あんたの名前は？」と尋ねると、和香は「ヨシグリ」と答えた。和香はフラフラしながらついていき、そのままザブザブ川に入っていく、頭まで潜った。12月だが寒さを感じず、目の前には誰もいないのに、いないはずの皆に対して川の水をかけていた。そうしているうちにトランス状態が抜けた。川から上がったとき、見届けた皆は帰っていった。和香の旦那さんが着替えを取りに行き、周囲から見えないようにKMさんに隠してもらって和香はズブ濡れになった衣装から着替えた。鉢巻も取った。しかし、マガタマだけはそのまま身につけていた。

着替えてから思勝に帰り、思勝の自宅でタカボンに盛った米に線香7本を立て、再び拝みをした。このときは、オヤサマとオヤサマの旦那さん、オヤサマの友人、両親、KMさん、和香の旦那さんが一緒に、皆で盃を交わした。和香は一人ずつにお礼を述べ、焼酎の神酒を瓶のフタに汲み、全員に配った。

その後、祭壇のある部屋のしつらえを変えている。祭

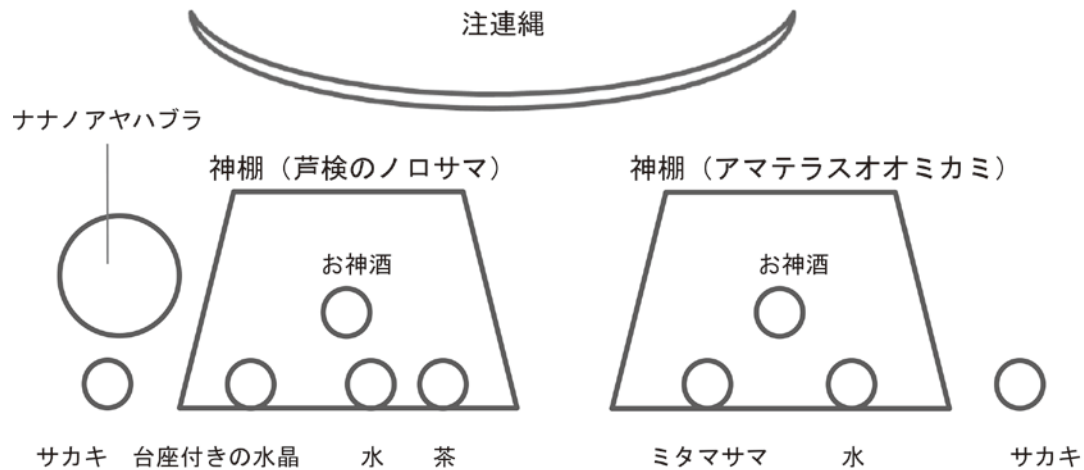


写真7 和泉家の祭壇

壇には、左は芦検のノロサマ、右はアマテラスオオミカミを祀った。最初のしつらえでは、向かって左側の神棚の位置に和泉家のノロサマの象徴であるオヒツ（櫃）が

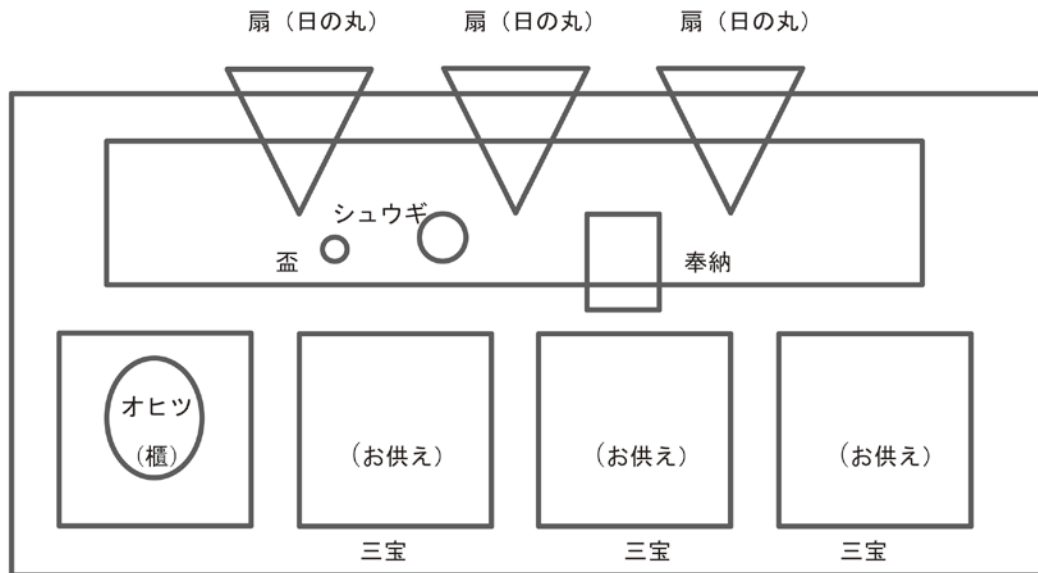
置かれていたが、これを変えたのである（写真7、図2参照）。新たにオヒツを置く台を事前に作ってもらっておいた（写真8参照）。

図2 和泉和香が使用する祭壇
[上段]



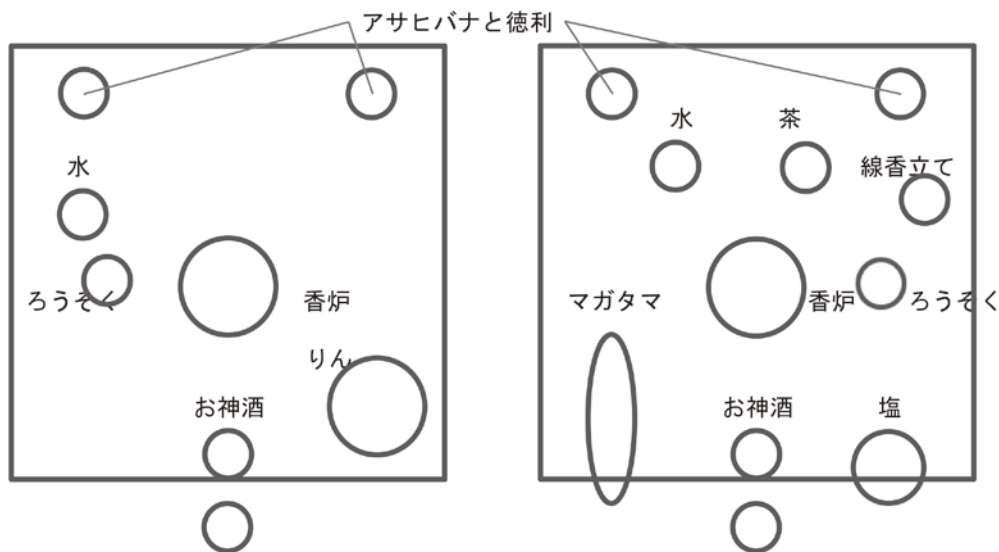
- 〈註1〉
- ・神棚は伊勢神宮近くの店から買った（形式は、オヤサマの祭壇の形式に合わせた）
 - ・最初是一只だけ先に買い、後日、芦検のノロサマの分としてもう一つ購入

[中段]



- 〈註2〉
- ・これらが乗るテーブルは元々家にあったものを流用
 - ・盃はアムイゴを掘ったときに出てきたもので、逆さ馬の画が描かれている
 - ・シュウギはアムイゴのカミサマ用のもので、たまたま乗せてあった
 - ・オヒツ（櫃）は神棚のかわり、ご神体のかわりとして祀っている（註3参照）
 - ・お供えものは、3つの三宝に載せる。場所は特段決まりはない（正月のときの鏡餅は中央に置く）

〔下段〕 ※タカボン2つ



〈註3〉

- ・左側：ノロサマ用タカボンで、水は和泉家のオヒツのカミサマの分
- ・右側：アマテラスオオミカミサマ（テルコガナシミカタサマ）用タカボンで、マガタマは使いやすい位置に置く
- ・お神酒は毎日足し、一杯になったら下げて、家じゅうの水の出口（排水口）を清めるのに使用する
- ・2018年6月20日に、和香が預かっていたオヒツが、本来祀られる場所（大和村戸円集落）へお戻りになったので、左側の水は、もうお供えしていない



写真8 オヒツ（櫃）とその台

【オヒツ（櫃）】

和香の旦那さんは、このオヒツが和泉家にあることを小さいときから知っていたという。思勝にある高千穂神社の神主を旦那さんの曾祖父が務めていたので、その道具かと思っていた。両親の隠居部屋を作るため、古い家の天井裏をみたときには、オヒツはそこにはなかった。家の下の棚の剣道具の隣に置いてあった。真っ黒になっていたのを拭いてみたらきれいになり、金と赤色のオヒツだとわかった（写真9・10参照）。旦那さんは仕事上、文化財を扱うこともあり、それが貴重なものだとわかったという。しかし、和香が騒ぐのはわかっていたので、旦那さんは黙っていた。このオヒツが見つかったのは2016年6月26日より前のこと（26日にはオヤサマが来宅し、これを確認しているため）。旦那さんから和香にSNSのLINEで連絡があったのは6月14日と思われるので、見つかったのはその前かもしれない。旦那さんはそのまま箱に入れて、中央公民館に持っていった。オヤサマに報告したところ、「すぐに実家にお供えしなさい！」とのこと。そこで和泉の実家にもまずお供えした。そのとき和香は精神的にも実家に入らず、このときはオヤサマに引っ張られて無理矢理、和泉の実家に入った。



写真9 オヒツ胴部分の詳細な文様



写真10 オヒツ蓋部分の詳細な文様



写真11 オヒツに収められていた祭祀用具と思われる玉ハベラやガラス玉など

オヤサマは、このオヒツは和泉家の家宝であること、家で祀ってほしい旨を和泉の父母に告げた。仏壇に線香を7本上げ、一族郎党のなかで名前に漢数字が入っている人が保管すべきだとオヤサマはいう。該当するのは旦那さんだけということがわかり、「あなたの家でお供えしましょう」といわれ、段ボールに入ったままのオヒツを床の間に置いた。しかし、段ボールのままでは、ということになり、盆（台）を作ってもらい、黄色いウコン染めの風呂敷で包んで置いておいた。ウコンは虫がつかないからだという（写真11参照）。

【アミゴ】

既述したように、和香は芦検のノロサマ、嫁ぎ先である和泉家のノロサマのアミゴに、それぞれの成巫儀式の際に行き、ミタマサマ（そのアミゴの石）を3個いただいてきた。カミサマになるためにはアミゴに挨拶する必要があるからである。

和香は当初、2か所のアミゴに挨拶しなければならなかった。

2017年2月15日、芦検のノロサマを迎えて初めてアミゴのカミサマの祭日に挨拶に行った。芦検（宇検村）に先に行き、後々は来られなくなることもあるので、思勝（大和村）のみで祭祀をやることを願った。思勝では今後とも宜しくと伝えた。

さらに面倒なことには、1回目と2回目で、思勝のアミゴがかわってしまった。降りたカミが和香自身の口を借りてアミゴの場所を指定してくる。最初は豊年祭のときの相撲の力水を汲む川の上流だった。しかし、ここに行くと、オヤサマがここは違うという。後日、エキ（易）で別の場所を見てみると、次にアミゴとして指定されたのは他人の家の敷地内であった（写真12参照）。ここを掘れ、そうするとウマ（馬）が出てくるという。そこには、きれいな女のカミサマがいるという。

屋敷の家主の許可を得て和香夫婦でそこに行くと、かつて大きな池があったという場所だった。どこを掘ったらいいかわからず、和香がアミゴのカミサマにどこから湧いていたのかと聞いてみたら、自分の頭のなかに湧いていたときの画像が見えた。カミサマが示された場所



写真12 思勝のアミゴのある場所



写真13 祭壇に供える水と神の水はアミゴで汲む

を掘ると、50～60センチメートルくらい掘ったところで盃が出てきた。その盃は「逆さ馬」の印が描かれた盃だった。そして、そこから水も出たが、濁っていた。思勝は元々水の出る土地である。カミサマに示された画像にはさらに黒い魚も見えた。その土地に住む家の家主に聞いたところ、家主の息子がかつてここにあった池で黒い鯉を飼っていたという（写真13参照）。

【祭壇とカミ道具（祭祀用具）】

祭壇に置かれているミタマサマは3つの石。これはアミゴでお預かりするようにオヤサマから指示されて預かった石で、これをミタマサマと称す。ミタマサマは本人が亡くなったら元の場所にお返ししなければならないとされている。和香は毎日洗い、ぬめりを取っている。

カミ道具はすべて名瀬の安田金物店で買った。同商店ではカミゴト（ユタの祭祀）に必要なものが店の一番奥まったところで一式売られていた。しかし、安田金物店は奄美市内の都市計画による道路の拡幅工事などの影響でやめてしまった。和香が幸運だったのは、この店でカミゴトのための最低限必要な道具一式が揃ったことで

あった。しかし、これからはどうしようと和香は考えてしまうという。

注連縄については、正月の注連縄を作っているIさんを安田金物店で紹介してもらい、作ってもらった。この人の旦那さんが、たい焼き屋をしていて、その店の裏で注連縄を作っており、カミゴト用の注連縄も注文を受けて作っている。Iさんから、オヤサマはどこの人かと聞かれ、和香が「佐仁の栄カミサマ」だと答えたら、カミサマ用のものを作ってくれた。この注連縄を替えるタイミングは新暦の正月でよいという。

Iさんは、ミキを作るときにツボの口を縛る縄も作ってくれた。この縄はサービスだった。また、祭壇の注連縄もカミゴトで使うものだからだと、1000円で作ってくれた。

神棚を載せる台も木工所で作ってもらった。その他、祭壇で使用している棚やタカボンなど、すべて柿渋を塗った仕上げになっている。台所に祀ってあるカミサマの祭壇も同じ木工所で作ってもらった。台所の祭壇では、火のカミサマと水のカミサマを祀っている。いわゆる、炊事のカミサマである。火のカミサマはヒノトヒヌカンといい、水のカミサマはスイジンと呼ぶ。

カミゴトで使用する衣装はネットで買えた。白の女物

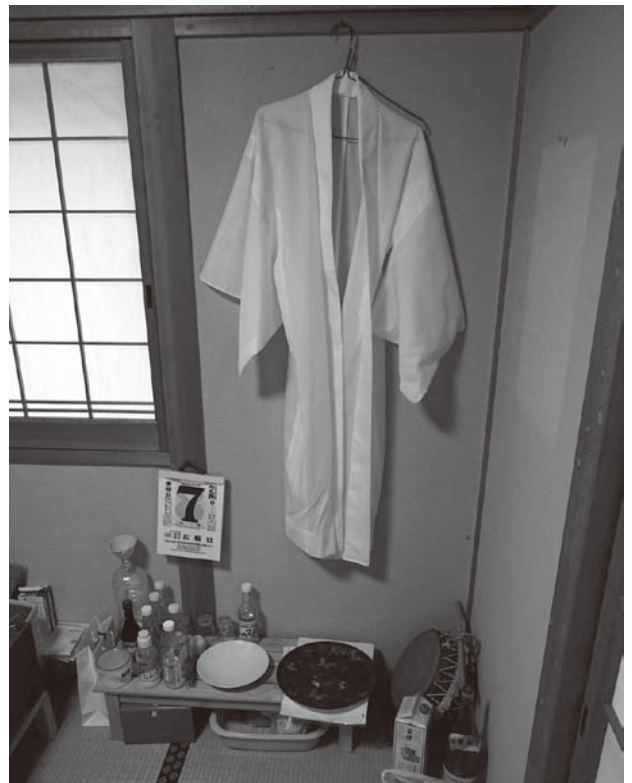


写真14 カミゴトで使用する衣装（右下はチジン）

の袴はウマノリ（馬乗り用）しかなかったため、買った店でまっすぐな形に仕立て直してもらった。ネットに巫女用の赤の袴はあったのだが、白はなかった。白の上着は、神社用のものを取りあえず買い、使用している（写真14参照）。

チヂン（太鼓）はカミサマに降りてきていただくときなど、カミゴトの際に使用する。八月踊りの際にも使うので、すでに買ってあった。このチヂンは笠利の人に作ってもらった。カミゴトとは無関係で買ったものである。

香炉のなかの砂は海砂を使用する。

祭壇にお供えする水、榊の水は、アムィゴからいただいた水を使う。癸酉（ミズノトリ）の祭日以外にも、毎週一度はペットボトル（2リットル×2本）を持参し、アムィゴへ行き水をいただく。湧水のアムィゴなので、底に沈殿物が多くなると水が湧き出なくなるので、定期的に沈殿物を除去している。

榊などを含め、カミゴトで出るクズはすべて海岸で焼いて、灰を海へお返ししている。

【カミサマとしての禁忌】

カミサマになってからは、祝儀不祝儀に参列できなくなった。たとえ身内であろうと、介在すれば靈魂に影響を与えるからとオヤサマからいわれている。生まれたばかりの赤ちゃんも、靈魂が不安定なため、33日間を経過しないとお祝いにいけないし、葬儀の場合も49日間は弔いに行けない。

実際に2017年の年明け早々、集落で悔やみがあった。和香の旦那さんは、それまでは集落の葬送儀礼の段取り役をしていたようだが、和香がカミゴトをしているため、段取り役を別の人にお願ひし、さらに役割も亡くなった方から一番遠い関係者で行なっているという。悔やみ事に参列する場合は、左綱（よりを戻さないように）を喪服の下に巻き、そして帰宅する前に、海水で体を清めてからでないと家には入れない。また、墓参りも同様に、衣服の下に左綱を巻くか、たすきがけにして、墓地の敷地から出る際には塩で清め、さらに帰宅前に、海に行き海水で清めてから家へ戻るのである。葬式に行くたび、カミサマとしての気遣いは大変なもので、旦那さんは実家に帰るようにしている。基本的に旦那さんとの接触はできない。

親族に不幸があった場合は基本、亡くなった日を含めて3日間、カミゴトにオヒマ（お暇）をいただく。この間は、祭壇での拝みはできないし、お茶や水も替えない。4日目は祭壇のアサヒバナをすべて作り替える。なお、

祖母の場合は3日間だったが、祖父のときはミキャノカ（21日間）オヒマをいただいた。

【色々な変化】

カミサマになって感じる大きな変化の一つに匂いのことがある。病院や葬儀場では、生臭い、魚が腐った以上の匂いを感じる。とにかく匂いに敏感になり、匂いを感じるようになったが、一緒にいた人間に確認してもそんな匂いはしなかったという。母からも、あんただけだといわれた。他人にはわからないようだ。オヤサマからは受け流せといわれている。

また、人とのやりとりのなかで、こらえられないことが多くなった。穏便に済ますことができなくなった。言葉（カミの考え）が前面に出てきてしまう。同時に、「違うでしょ」とはいえないストレスも溜まるようになった。カミの子であるとともに人間の子でもあるという、人間社会のなかでのそのバランスが難しいと感じる。

2回目の成巫儀式のあと、和香はオヤサマから色々なところからそろそろ手を引けといわれた。短大を出て学問があるということが、カミサマとしての成長に結びつかないというオヤサマの指摘であり、和香自身も葛藤があるという。

おわりに

既述したように、本稿は「奄美におけるユタの成巫過程に関する覚書」として、まとまりのないかたちで稿が閉じられているうえ、2020年2月に聞き取り調査を行った内容や、インフォーマント自身に記してもらった成巫に至る経緯等に関する内容についても、残念ながら紙幅の関係もあり紹介するまでには至っていない。これらの内容を含む全体のまとめと事例内容の検討については稿を改めさせていただく。また、調査にご協力いただいた関係者各位には一旦ここで御礼申し上げるが、本紀要の次号において改めて謝辞として記させていただくことをお許しいただきたい。

なお、本来こうした個人情報にも関わる内容については実名掲載は憚られるのが通例である。にもかかわらず、実名での掲載を快く承諾していただいた和泉和香氏には心より御礼を申し上げたい。筆者には、その姿勢がユタとして生きていくと決意した彼女の覚悟を表明しているように思われた。

（※以下、次号）

【参考文献】

- ・ 桜井徳太郎 1973『沖縄のシャマニズム—民間巫女の生態と機能—』弘文堂
- ・ 佐々木宏幹 1983「奄美・沖縄のユタの祭壇構成におけるヴァリエーションについて—ユタの呪術＝宗教的観念・行為に関連づけて」『現代のエスプリ〈奄美の神と村〉』194（再録）（『奄美—自然・文化・社会—』弘文堂，1982，初載）
- ・ 八木橋伸浩，栄和香 1999「豊年祭と相撲」『論叢』（玉川学園女子短期大学紀要）23
- ・ 八木橋伸浩 2000「民具と民俗資料—豊年祭の相撲様式変化の事例を端緒として—」『民具マンスリー』33-9，神奈川県立日本常民文化研究所
- ・ 八木橋伸浩 2008「相撲形態からみた琉球弧の文化変差」『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』1
- ・ 山下欣一 1977『奄美のシャマニズム』弘文堂
- ・ 山下欣一 1983「奄美におけるユタの成巫過程について」『現代のエスプリ〈奄美の神と村〉』194（再録）（『日本民俗学』74，日本民俗学会，1971，初載）

（やぎはし のぶひろ）